『過ぎし年月の物語』における無人称不定形構文の用法

渡　邉　　聞

はじめに

本稿はロシア年代記『過ぎし年月の物語（Повесть временных лет）』に現れる無人称不定形構文（безличные инфинитивные предложения）において、動詞不定形がどのように機能しているのかを分析し、その規則性を解明しようとするものである。無人称不定形構文を含めた動詞不定形の用法は古期ロシア語[(1)]において多岐に渡っている。動詞としての働きをする場合もあれば、名詞として働く場合もあり、法や時制を表わさない代わりに様々なモダリティを表示するのがその大きな特徴であるといってよい。今回取り上げた無人称不定形構文も古期ロシア語のテクストの中では頻繁に現れる形でありながらそれらの解釈の仕方には訳者間でばらつきが見られる。そこで本稿では『過ぎし年月の物語』の中に出現する無人称不定形構文を含んだ動詞不定形がどのような状況でいかなるモダリティを表示することが可能であるのかについて考察を行ないたい[(2)]。

1. 『過ぎし年月の物語』について

1-1. ラヴレンチー年代記の成立

今回テクストとして用いたラヴレンチー年代記（Лаврентьевская летопись）は、1377年にスズダリ·ニジェゴロド大公ドミトリー·コンスタンティノヴィッチの命により修道僧ラヴレンチーが書き写したものである。それ故「ラヴレンチー写本（Лаврентьевский список）」と呼ばれることもある。この年代記はスラヴ民族の起こりから書き起こして、1305（6813[(3)]）年までの事件を年代ごとに編年体で記したものである。またこの年代記は

1　本稿ではロシア語の時代区分に関して *Стеценко А.Н.* Исторический синтаксис русского языка. Изд. 2-е. М., 1977. С. 7. を基準とする。Стеценко は「ロシア語の時代区分に関してはいまだ結論が出ていない」とした上で、「現時点で有力な見解を採用した」として、11世紀から14世紀までのロシア語を древнерусский язык、15世紀から17世紀までのロシア語を старорусский язык、18世紀以降を русский национальный язык と定義している。これらを踏まえた上で、本稿で用いる前者2つの邦訳をそれぞれ「古期ロシア語」、「中期ロシア語」とした。ただしこれらの名称の邦訳に関しては定まったものがなく、この表現の使用はあくまで暫定的なものである。また時代区分の方法に関しても、今回は本稿のテーマに直接的な影響を及ぼさないことを考慮して現時点でもっとも有力と思われる案を採用したことを付け加えておく。

2　本稿は2001年に筆者が日本ロシア文学会関西支部において行なった口頭発表に補筆したものである。なお今回の補筆にあたっては文献の和訳に際して、とりわけ宗教的内容の強い部分の表現方法に関して匿名査読者から多くの助言をいただいた。

3　ルシ（古代ロシア）ではビザンティン（東ローマ）帝国で用いられていた世界開闢暦によって年号が数えられていた。これは旧約聖書創世記にある天地創造をその元年とするもので、これによると世界

二つの部分からなっている。すなわち原初の時代から 1110(6618)年までを記した『過ぎし年月の物語(Повесть временных лет)』と 1111(6619)年から 1305(6813)年までを記した『スズダリ年代記(Суздальская летопись)』である。今回はラヴレンチー年代記の前半部分にあたる『過ぎし年月の物語』をテクストとして用いる。

1-2. 『過ぎし年月の物語』の成立過程と構成

『過ぎし年月の物語(Повесть временных лет)』は現在まで二つの稿によって伝わっている。便宜上これらをそれぞれ第二稿、第三稿とすると、第二稿とされるものは「ラヴレンチー年代記(Лаврентьевская летопись)」、「ラジヴィル年代記(Радзивиловская летопись)」及び「モスクワ·アカデミー年代記(Московско-Академическая летопись)」とその他のいくつかの年代記中に見られる。これに対して第三稿とされるものは「イパーチー年代記(Ипатьевская летопись)[(4)]」の中に見られる。これらはすべて今日その存在が確認されていないキエフ·ペチェルスキー大修道院の修道僧ネストルによる初稿に基づくものであると考えられている。ただしこのネストル編纂の『過ぎし年月の物語』がすべての原型というわけではない。『過ぎし年月の物語』は古期ロシア語の構造を知る上で大変貴重なものではあるが、その編纂過程は大変複雑かつ重層的あり、これを資料として古期ロシア語について論じる際にはそれぞれの編纂によって起こったと思われる部分的な違いにも注意を払う必要がある。Шахматов[(5)]、Приселков[(6)]らは、以下のようないくつかの編纂段階が存在するとしている。

1037 年　最古の集成(Древнейший свод)
1073 年　ニコンの集成(Свод Никона)
はじめの集成(Начальний свод)
1113 年　ネストル編『過ぎし年月の物語』[上述の初稿]
1116 年　シルヴェストル編『過ぎし年月の物語』[同第二稿]
1118 年　1118 年編『過ぎし年月の物語』[同第三稿]

ネストルは「はじめの集成」を用いながらも、スラブ民族の起源を聖書の内容に結び付けて記述し、またルシの起こりを世界史との関係の中で記述するといった独自の記載を追加してキリスト教の影響を受けた年代記の形として完成させた。また彼はビザンティン帝国の年代記を用いてビザンティンとルシの間の条約文を追加したり、その他にも民俗伝承等の資料を用いて数々の逸話を「はじめの集成」の中に盛り込んだりして、自らの編纂した『過ぎし年月の物語』を形作っていったと考えられている。

の始まりは西暦紀元前 5508 年である。従って現行の西暦の年号を求めるためにはこの世界開闢暦から 5508 を引けばよい。ただしビザンティンでは 9 月 1 日に新年が始まるのに対して、ルシではビザンティンより半年遅れて 3 月 1 日に新年が始まる暦法を採用していた。よって正確には月によって世界開闢暦から引く数が異なる。すなわち 3 月から 12 月では世界開闢暦から 5508 を引き、1 月と 2 月では世界開闢暦から 5507 を引くことによって現在の西暦の年号が得られる。詳しくは今村栄一他「スズダリ年代記訳注」『古代ロシア研究』第 20 号、2000 年、11 頁参照。

4 「イパーチー年代記(Ипатьевская летопись)」にはイパーチー写本(Ипатьевский список)とフレブニコフ写本(Хлебниковский список)の二つの写本が含まれる。

5 *Шахматов А.А.* Разыскания о древнейших русских летописных сводах. СПб., 1908. С. 1-13.

6 *Приселков М.А.* История русского летописания XI-XV вв. СПб., 1996. С. 48-84.

上述のようにこのネストル編の『過ぎし年月の物語』の原本は今日まで見つかってはいない。今回テクストとして用いたラヴレンチー年代記の『過ぎし年月の物語』は、1116 年に編纂されたシルヴェストルによる写本に基づくものである。このシルヴェストル編の『過ぎし年月の物語』は 1113 年にキエフ大公となったヴラヂミル·モノマフ(Владимир Мономах)[D1][7]の命によるものであり、その結果として 1093 年以降の記述に関してシルヴェストルによって、主にモノマフに関する記事を肯定的にするといったような書き換えが行なわれた可能性があるとしている[8]。その理由はこの時期にヴラヂミル·モノマフ[D1]と彼の政敵であった前キエフ大公スヴャトポルク(Святополк)[B3](在位 1093-1113)に関する記述が増えるからである。とはいえ、このシルヴェストル編の『過ぎし年月の物語』もネストル編のものとの間に極端な内容の違いがあるわけではないと思われる。

このように複雑な経緯をたどって今日まで伝えられてきた『過ぎし年月の物語』であるが、この作品を貫くテーマは異民族(ポロフツィ:половцы)によるルシの地の襲撃、及びそれらとロシア諸公の戦いの記録、そしてロシア諸公に対する平和統一の呼びかけである。またこのラヴレンチー年代記内の『過ぎし年月の物語』には、他の年代記には見られない「モノマフの教訓(Поучение Мономаха)」という長大な逸話が挿入されるなどその内容は単なる歴史事件の羅列に留まらず、ある種物語的な要素も持ち合わせている。

本稿の議論は『過ぎし年月の物語』の全編にあらわれる無人称不定形構文をその対象にする。このように複雑な成立過程を踏んだ結果として、歴史的事件の記述や条約文、物語といった様々なジャンルの文体を含み、且つ書き言葉の他に直接話法や年代記作者自らが心情を吐露する一人称文等が一つの作品の中に混在しているので、無人称不定形構文の用法も多岐にわたることが予想される。このような変化に富むデータを分析することによって古期ロシア語における無人称不定形構文の特徴を明らかにしたい。

2. 無人称不定形構文の構造

2-1. 無人称不定形構文の定義

本稿では文中で独立した成分として動詞不定形が述語の働きをする構文のことを、無人称不定形構文(безличные инфинитивные предложения)と呼ぶことにする。このような分類をしているのは Борковский[9]や Стеценко[10]といったロシア語学者らである。彼らが単独で述語となる動詞不定形を含む構文を無人称構文に分類する理由は、1)主格に立つ主語がないこと、2)行為や状態の主体は述語に支配されない与格によって表わされることによっている。また Стеценко[11]によると無人称不定形構文の特徴としては a)古期ロシ

7 [ ]に囲まれた番号は、古代ロシア研究会によるいくつかの翻訳に用いられている公名の背番号である(「リューリック王朝系図」『古代ロシア研究』14 号、1981 年、33-57 頁参照)。

8 *Приселков.* История русского летописания. С. 80.

9 *Борковский В.И.* Сравнительно-исторический синтаксис восточнославянских языков: типы простого предложения. М., 1968. С. 108-193; *Борковский В.И.* (ред.) Историческая грамматика русского языка: синтаксис, простое предложение. М., 1978. С. 230-295.

10 *Стеценко.* Исторический синтаксис русского языка. С. 78-91.

11 Там же. С. 89-91.

ア語及び中期ロシア語に頻繁に用いられること、b) ある特定のジャンル、即ち実務文書（法律関係文書）と一部の物語作品（年代記）において頻繁に用いられること、そして c) コンテクストが明らかな場合、動作主体を表わす与格は省略されることといったものが認められている。また無人称不定形構文は様々なモダリティを表わすことが知られている[12]。具体的には「不可避性」、「必然性」、「可能性·不可能性」等が挙げられる。

〔無人称構文の例〕[13]

(1) и повелѣ Ѡльга ꙗко смерчесѧ пустити голуби и воробьи воемъ своимъ. (059.18-20)
するとオリガ[02W]は黄昏時に鳩と雀を放すように自分の軍勢に命じた[14]。

〔無人称不定形構文の例〕[15]

(2) рече Добрына Володимеру 《сглѧдахъ колодникъ ѡже суть вси в сапозѣхъ. симъ дани намъ не даꙗти. поидемъ искать лапотниковъ.》(084.09-12)
ドブルィニャはヴラヂミル[06]に「捕虜を見ると、全て長靴を履いています。私達はこの者たちに貢税を課すべきではありません。わらじを履いている者たちを探しに行きましょう。」と言った。

例文(1)は『過ぎし年月の物語』の中に表われる無人称構文の例である。смерчесѧ は動詞 съмьркнѹтисѧ のアオリスト三人称単数の形で実際には動詞に対する主格の主語は存在しない。このように通常の無人称構文は、動詞の形態を三人称単数形にして、主格主語を置くことはない。これに対して無人称不定形構文の例である例文(2)では動詞が不定形のため特定の人称や時制は表わされていない。その代わりここでは動詞不定形が「不可避性」、「必然性」のモダリティを表わしている。更にこの構文の動作主体である“私達”は与格形によって表わされている。

12　Там же. С. 88.

13　以下『過ぎし年月の物語』からの引用に関しては次のようにする。例文は Полное собрание русских летописей, издаваемое постоянною историко-археографической комиссиею Академии Наук СССР. Т. 1: Лаврентьевская летопись. Вып. 1: Повесть временных лет. Изд. 2-е. Л., 1926（『ロシア年代記全集』第１巻「ラヴレンチー年代記」第１部「過ぎし年月の物語」第２版）から採用した。省略綴りの使用に際して原写本でそれぞれ綴りの上部に補われている小型文字は、その本来あるべき位置に戻してある。また титло（略号符）が用いられている場合には、省略されている語を（　）に入れて補った。古期ロシア式のキリル文字による数の表現はアラビア数字に書き改めた。それぞれの例の末尾にある数字は引用したテクストのコラム数と引用文の行数を表わしている。

14　本稿で用いる例文の訳は、國本哲男、山口巌、中條直樹（訳者代表）『ロシア原初年代記』名古屋大学出版会、1987 年における邦訳、*Лихачев Д.С. и Дмитриев Л.А.* (ред.) Памятники литературы Древней Руси. Начало русской литературы. XI – начало XII века. М., 1978. 及び *Лихачев Д.С. и др.* (ред.) Библиотека литературы Древней Руси. Том 1. XI–XII века. СПб., 1997. の現代露訳、更に Franciszek Sielicki, *Powieść minionych lat* (Wroclaw: Zakład Narodowy im. Ossolińskich - Wydawnictwo, 1999). による現代ポーランド語訳を参照しつつ無人称不定形構文の構造がわかるように筆者が行なった。

15　直接話法の部分については原写本には特に示されてはいないが、本稿では《　》を用いてわかりやすくした。

2-2. 現代ロシア文法での分類

これに対して1980年版アカデミー文法ではこのような分類はしておらず、不定形構文(инфинитивные предложения)というカテゴリーを設けている[16]。しかし不定形構文の持つ意味は、歴史文法の分野でСтеценкоが無人称不定形構文のために定義したものと同内容だといって良い。また80年文法では不定形構文の文法的特徴としてその法と時制のパラダイムについて述べている。

現在形　Здесь не пройти.
　　Нам вместе работать.
過去形　Здесь было не пройти.
　　Нам было вместе работать.
未来形　Здесь будет не пройти.
　　Нам будет вместе работать.
仮定法　Здесь было бы не пройти.
　　Нам было бы вместе работать.
　　Здесь бы (было бы) не пройти.
　　Нам бы (было бы) вместе работать.

このパラダイムでは過去形、未来形及び仮定法にбыло、будет、было бы という動詞быть の三人称単数形が表われている。しかし不定形構文が法や時制を表わす際になぜ三人称単数を用いるのかについての説明はない。Пешковский[17]もまた著書において「不定形構文」というカテゴリーを設けている。その中で彼は、不定形構文が仮定法を伴うことは現代ロシア語でも一般的であるのに対して、不定形構文が過去時制や未来時制を伴うことが「極めて稀」であると述べている。その上で彼は、もし不定形構文が過去時制や未来時制を伴う場合、無人称構文と類似する形態であることを認めている。そして不定形構文がбыло やбудет を伴う場合、「実質的には無人称構文と分類することが好ましい」と述べているのである[18]。

2-3. 本章のまとめ

本章ではロシア歴史文法とロシア現代文法の間で構文の分類が異なることを見てきたが、その原因は構文の頻度と関係があることがわかった。すなわち、было, будет＋動詞不定形という構文は古期ロシア語においては頻繁に現れたため、無人称構文に分類しておいて不都合はなかったが、現代ロシア語文法ではほとんど廃れてしまったбыло, будет＋動詞不定形という構文をわざわざ別カテゴリーとする必要がなくなったのだと思われる。このことから本稿で用いる「無人称不定形構文」とは現代ロシア語文法での「不定形構文」とほぼ同義と見ることができる。

---

16 *Шведова Н.Ю.* (ред.) Русская Грамматика. Том II. Синтаксис. М., 1982. С. 373-378.
17 *Пешковский* А.М. Русский синтаксис в научном освещении. Изд. 7-е. М.: Repr. Tokyo, 1987. С. 381-385.
18 *Пешковский.* Русский синтаксис в научном освещении. С. 384.

3. 『過ぎし年月の物語』に見られる無人称不定形構文

3-1. 使用テクスト及び分析に関する留意点

今回分析に用いるテクストは Полное собрание русских летописей, издаваемое постоянною историко-археографической комиссиею Академии Наук СССР. Т. 1.: Лаврентьевская летопись. Вып. 1: Повесть временных лет. Изд. 2-е. Ленинград. 1926.（『ロシア年代記全集』第 1 巻「ラヴレンチー年代記」第 1 部『過ぎし年月の物語』第 2 版）とする。更に本稿ではこのテクストの全 286 コラム中に現れる動詞不定形の中にあって単独で述語として働くもののみをその考察対象とする[19]。なお、『過ぎし年月の物語』の中には、今回対象とする単独で述語として機能する動詞不定形の他にも、様々な動詞不定形の用法が見られる。本稿では考察対象としない動詞不定形の用法を以下に例文付で示すことにする。

1）名詞に付随する動詞不定形

в нихъ же суть храбрꙗ женꙑ ловити звѣрь крѣпко. (015.18-19)

彼らの中には獣を見事に捕らえる勇敢な女達もいる。

2）супин（目的･動機を示す動詞的名詞）の代わりとして用いられる動詞不定形[20]

рѣша Русь Чюдь [и][21] Словѣни и Кривичи《всѧ землѧ наша велика и ѡбилна а нарѧда в неи нѣтъ да поидѣте кнѧжить и володѣти нами.》(019.24-020.03)

ルシに対してチュヂ、スロヴェネそしてクリヴィチが「我々の国の全体は大きく、そして豊かですが、その中には秩序がありません。公となるため、そして我々を統治するために来てください。」と言った。

3）名詞的用法の動詞不定形

єтеръ же законъ Халдѣємъ [и] Вавилонѧмъ м(а)т(є)ри поимати съ братними чадꙑ блудъ дѣꙗти и ѹбиваті. (015.09-11)

カルデアとバビロン人には別の掟がある。すなわち母を娶ること、兄弟の子供達と姦淫を行なうこと、そして殺人を行なうことである。

---

19 本稿の無人称不定形構文の邦訳に関しては、動詞不定形の表わす「不可避性」、「可能性・不可能性」、「必然性」といったモダリティをわかりやすくするために、意図的に「～すべき」、「～できる」、「～ればならない」といった訳を用いた。このような訳出は定型的であり、文学作品に関して行なうべきものではないかもしれない。ただ、本稿では無人称不定形構文がどのようなモダリティを持つのかを明確に示すことがそのテーマであるが故に暫定的にこのような処置をとることにした。今後の研究ではより発展的な解決法を探る必要性がある。

20 супин は目的分詞とも呼ばれ、運動動詞、及びその複合動詞と共に用いられ、目的の従属節の代わりをつとめる。しかし古期ロシア語ではすでに супин の代わりとして動詞不定形を用いることがあった。

21 [　] で囲まれた部分は、今回用いたテクストにおいて編者によって異本から補われている部分である。

4) 原写本の動詞不定形では意味が取れず、他の写本に不定形以外のヴァリアントが存在する動詞不定形

живѧше же ѡльга съ с(ъı)н(о)мъ своимъ С(вя)тославомъ и ѹчашеть и м(а)ти кр(ь)ститисѧ и не бѣжаше того ни [во] ѹши приимати. (063.04-07)〔モスクワ·アカデミー年代記(Московско-Академическая летопись)において下線部は не внимаше(耳を傾けないでいた)である。対訳はこれをもとに行なった。〕

オリガ[02W]は自分の息子のスヴャトスラフ[03]と共に暮らしていたので、母は彼に洗礼を受けさせることを教えた。すると彼はそのことを気にもかけず、耳を傾けないでいた。

5) 合成動詞述語の一部をなす動詞不定形

この場合、мощи のように助動詞として動詞不定形を要求するもの、начати のように動詞不定形を要求可能であることが辞書に明記されているもの[22]と同時に、今回は「定動詞＋動詞不定形」の形は全て省くことにした[23]。

молисѧ за мѧ ѡ(ть)че ч(е)стнъıи избавлену бъıти ѿ сѣти неприıазнинъı. (214.10-11)

尊い師父よ、悪魔の網から守られるように私のために祈ってください。

以上の動詞不定形のタイプを除いた上で、無人称不定形構文をテクスト上の特徴から次の様に分類した。

A) 地の文

B) 会話文

C) 作者によるコメントタイプの文

C) 作者によるコメントタイプの文とは 1091 (6599) 年の記事ように年代記作者ネストルがペチェルスキー大修道院院長フェオドシーの遺体を発見した時の模様を自らの心情を盛り込んで記述している部分や、1096 (6604) 年の直後に置かれている「モノマフの教訓(Поучение Мономаха)」のように主に一人称の視点から文章が書かれているものを表わす。これ以外にも『過ぎし年月の物語』では文中において突然作者のコメントと思われる部分が挿入されることがある(下の例文(3)参照)。このようなタイプの文をすべて「作者によるコメントタイプの文」に含めることにする。これに対して A) 地の文とは、上記の C) 作者によるコメントタイプの文と B) 会話文を除いた残りを指すことにする。

(3) Ѡлегъ же и Борисъ придоста Чернигову мнѧше ѡдолѣвше а землѣ Русьскѣи много зло створше. проливше кровь х(ре)с(т)ьıаньску єıаже крове взищеть Б(ог)ъ ѿ руку ѥю. и ѿвѣтъ дати има за пагубленьє д(ѹ)ша х(ре)с(т)ьıаньскъı. Всеволодъ же

22 辞書には Словарь русского языка XI-XVII вв. Т. 1-26. М., 1975-2002. を用いた。またこの辞書の刊行されていない部分(с 以降)については、*Цейтлин Р.М., Вечерки Р. и Благова Э.* (ред.) Старославянский словарь (по рукописям X-XI вв.). М., 1994. で確認を行なった。

23 このような「定動詞＋動詞不定形」といったもの(例えば Учусь читать 読み方を習う)が合成動詞述語の一部をなすものか、それとも補語かといった問題には結論が出ていない(*Золотова Г.А.* Коммуникативные аспекты русского синтаксиса. М., 1982. С. 249)。しかしいずれにせよこの場合動詞不定形は単独で述語となりえないので今回は一括して調査の対象から外すことにした。

приде к брату своюмy Изѧславу Киеву... (200.12-18)

オレグ[C4]とボリス[E1]は、勝ったと考えてチェルニゴフにやって来てルシの国に多くの悪事を働き、キリスト教徒の血を流した。神は彼ら二人の手からルシの国の血(の償い)を取られるであろう。彼ら二人はキリスト教徒の魂の破滅に対する責任を負わなくてはならない。フセヴォロド[D]はキエフの兄イジャスラフ[B]のもとにやって来て…

3-2. 『過ぎし年月の物語』における無人称不定形構文の出現分布

3-1 においてテクスト上での動詞不定形の分類方法を提示した。それに従い、『過ぎし年月の物語』の作品中で無人称不定形構文が時間的にどの位置に現れるかを検討する。“1.『過ぎし年月の物語』について”で既に述べたように、『過ぎし年月の物語』は長い時間をかけて複数の編者によって重層的に作り上げられたものである。従って作品の全編に渡って様々な時期の文体がモザイクのように組み合わされている可能性がある。よって『過ぎし年月の物語』全体の形式を研究する際にはこの問題に十分な注意を払う必要があると考えられる。今回は作品の編纂過程を明らかにすることよりも、無人称不定形構文の作品内での働きを見ることに主眼を置いているため各年の記事の長さに関わらず、年で区切って各年の無人称不定形構文の出現頻度を見ることにした[24]。

その結果として明らかになったことをまとめると次のようになった。無人称不定形構文は「会話文」において最も多く出現し、同構文全体の 6 割以上を占める結果となった。次いで「作者によるコメントタイプの文」、「地の文」といった順になった。また年代別の使用頻度を見てみると、986 年、1071 年、1074 年、「モノマフの教訓」の各記事において無人称不定形構文が頻出しているという傾向も明らかとなった。本稿ではこれらの結果から使用頻度に偏りの見られた上記の記事における無人称不定形構文のテクスト内での働きを考察することにする。

4. テクストのタイプと無人称不定形構文の関係

4-1. テクストの特徴

本章で取り上げるのは無人称不定形構文が多く現れる 3 年分の記事と作者によるコメントを表示する一人称の文体が特徴的な「モノマフの教訓」の 4 つのテクストである。

986 年　ウラヂミルのもとにやって来た様々な宗教の宣教師団

1071 年　異教の占師達の活動と彼らとの問答

1074 年　ペチェルスキー修道院のフェオドシーとその他の修道僧について

「モノマフの教訓」

記事の内容を簡単に説明すると、986 年の記事はキエフ大公ウラヂミル[06](在位 980-1015)のもとへマホメットを信仰するボルガリ[25]、ネムツィ[26]、ハザールのユダヤ教信者、

24　1096 (6604)年の後にある「モノマフの教訓」、「モノマフの手紙」及び「モノマフの祈り」はそれぞれ独立した記事として扱った。

25　ヴォルガ河畔に住む民族。

26　ローマ教会に属するカトリック教徒の意味。

そしてグレキの哲学者が次々とやって来て自分達の信仰について説明してウラヂミルに改宗を迫る場面である。1071 年は悪魔に唆された二人の占師の奇行と占師全般に見られる彼らの外見の陰気さについての説明である。1074 年はペチェルスキー大修道院院長フェオドシーの臨終についての物語とその他の高潔な修道僧たちの逸話数編が語られている。また「モノマフの教訓」は詩篇と聖者伝に始まり、ウラヂミル·モノマフ[D1]の息子達への詳細な教訓、1073 年から 1117 年までのモノマフの遠征と冒険を日記風につづっている。これらの 4 つのテクストには「直接話法文」と「作者によるコメントタイプの文、または一人称文」が多いという特徴が見られる。

4-2. テクスト分析(986 年)

(4) ѡни же рѣша《вѣруємъ Б(ог)у а Бохмитъ нъı ѹчить гл(агол)ѧ『ѡбрѣзати ѹдъı таинꙗ и свининъı не ꙗсти вина не пити [а по с(ъ)мр(ь)ти же рече《『со женами похоть творити блѹднꙋю』(27)》] дасть Бохмитъ комуждо по семидесѧт женъ краснъıхъ исберетъ єдину красну и всѣхъ красоту възложить на єдину та будеть емꙋ жена иде』 же рече《достоить блудъ творити всѧкъ на семь свѣтѣ аще буде кто ѹбогъ то и томо.》(084.21-085.01)

彼らは「私たちは神を信仰しています。またマホメットは私たちに教えて『性器を割礼すべきです。そして豚肉を食べるべきではありません。酒を飲むべきではありません。しかし死後には女たちと淫行が許されるべきです。』と言っています。マホメットは誰にでも七十人ずつの美しい女を与え、一人の美しい女を選んで全ての者の美しさをその一人に与えます。その人が彼の妻となります。この世ではあらゆる淫行をなすべきですが、この世で貧しい者はあの世でも(そうだ)、と彼は言っています。」と言った。

このテクストの特徴としては全ての無人称不定形構文が直接話法ないしは直接話法内の引用文の中で用いられているということが挙げられる。Борковский(28)によると、無人称不定形構文は古期ロシア語の物語作品においてコンテクストに応じて何らかの「不可避性」·「可能性」を表わすとされており、これに従うとこれらすべての無人称不定形構文はѡбрѣзати「割礼すべきです」、не ꙗсти「食べるべきではありません」、не пити「飲むべきではありません」、похоть творити блѹднꙋю「淫行が許されるべきです」と訳すことが出来る。ただし похоть творити блѹднꙋю の場合、文脈から「淫行することが出来ます」と「可能性」の意味で訳すのが一般的である(29)。

---

27 直接話法内の引用文は『 』で表わす。

28 *Борковский.* Сравнительно-исторический синтаксис. С. 166.

29 この例文(4)の最後の無人称不定形構文の訳では、筆者のように「淫行が許されるべきです」と不可避性のモダリティを付して訳している例は 1 例もない。この箇所の古代ロシア研究会訳では、
彼らは「私たちは神を信仰しています。またマホメットは私たちに教えて『割礼しなさい。そして豚肉を食べず、酒を飲んではなりません。その代わりにしかし死後には女たちと淫行することができます。』と言っています。
として「姦淫することができる」と可能の意味で訳してある。おそらくこれは Лихачев 編の 1978 年版ロシア語訳(C. 99)に影響を受けたものと考えられる。

(5) Тако Б(ог)у возлюбившю новꙗ люди рекъ имъ《снити к нимъ самъ ꙗвитисѧ ч(е)л(о)в(ѣ)к(о)мъ плотью и пострадати за Адамово преступленьє.》(099.29-100.02)

このように神は新しい民を愛されたので、「自ら彼らのところに降りて、肉体をもった人間として現れ、そしてアダムの罪のために苦しもう。」と彼らに言いました。

この例文(5)の無人称不定形構文には、例文(4)で見られたような「不可避性」や「必然性」のような強い意味は感じられない。ここにあるのは話し手の意思ほどの意味である。なおこの箇所の Лихачев 編の 1978 年版ロシア語訳（C. 115）ではこの箇所は以下のように訳されている。

Так возлюбил Бог новых людей и открыл им, что сойдет к ним сам, явится человеком во плоти и искупит страданием грех Адама.

現代ロシア語訳ではこの無人称不定形構文に対して特別なモダリティを付加して訳出していない。動詞はすべて完了体動詞現在形を用いており、文字通りに解釈した場合、現代語においては未来の意味を表わしているに過ぎない。

この 986 年のテクストで見られるような意味の違いが起こる可能性としては、直接話法の発話者と動詞不定形の動作主体との関係の相違が考えられる。例文(4)では直接話法の発話者はマホメットであり、直接話法内の動詞不定形の動作主体はイスラム教徒達である。これに対して例文(5)では直接話法の発話者も直接話法内の動詞不定形の動作主体も共に神である。つまり不定形を述語とする無人称不定形構文を含んだ一連の文において、「直接話法の発話者≠直接話法内の無人称不定形構文の動作主体」の関係が成り立つ時、無人称不定形構文は「不可避性」·「必然性」や「可能性」のモダリティを表わす。一方で「直接話法の発話者＝動詞不定形の動作主体」の関係が成り立つ時、無人称不定形構文は一般に言われているような「不可避性·必然性」ないしは「可能性」のモダリティを持たないということが考えられる。この際、現代語訳では完了体動詞、およびその現在形を用いて未来の意味

Они же ответили: «Веруем Богу, и учит нас Магомет так: совершать обрезание, не есть свинины, не пить вина, зато по смерти, говорит, можно творить блуд с женами. ...»
更に Sielicki のポーランド語訳（p. 68）も同様である。
Oni zaś rzekli :“Wierzymy w Boga, a Mahomet nas naucza, każąc obrzezać członki wstydliwe i świniny nie jeść, wina nie pić, za to po śmierci, mówi, można z niewiastami używać rozpusty. Da Mahomet każdemu po siedemdziesiąt niewiast pięknych, wybierze jedną piękną i piękność wszystkich na nią przeniesie, ta będzie mu żoną. Tu zaś, powiada, należy oddawać się wszelkiej rozpuście. Jeżeli kto na tym świecie będzie ubogi, to i na tamtym.”

ここで Sielicki は obrzezać「割礼する」、nie jeść「食べない」、nie pić「飲まない」を każąc（kazać:「命じる」の副動詞）の補語として訳しており、一方で używać rozpusty「姦淫する」には「可能」の意味を表わす無人称述語 można が付与されている。以上のように今回参照したすべての文献がこの箇所だけを他と区別して「可能性」のモダリティを付加して訳していることになる。条件的には前の 3 例の無人称不定形構文と похоть творити блоудꙗ との間に構文的な差が見られるわけではない。考えられるのは「姦淫」の持つ言葉の意味から考えて、その行為を義務として訳すよりも可能で訳すことが文脈上（更には倫理上）適切であるからとも考えられる。なお、この похоть творити блоудꙗ を含む [　] で括られた文は今回テクストとして用いたラヴレンチー写本では存在せず、ラジヴィル写本からの追加文であることを付け加えておく。

で訳出している傾向があるようである。ただし、動詞不定形は時の概念から切り離されたものであるので、これを単純に現代語で言うところの「未来」の意味とすることはできない。動詞の直説法未来が古期ロシア語の段階では時制として形態的に不完全であったことを鑑みると、本稿ではこれらの無人称不定形構文が持つ意味を「予定・予告」のニュアンスと暫定的に呼ぶこととする[30]。更にこれらの無人称不定形構文の述語として用いられる動詞不定形には完了体動詞が現れることが多いという傾向がみられる[31]。

4-3. テクスト分析（1071 年）

この 1071 年の記事も 986 年のテクストと同様、直接話法文が多く現れる。

(6) рече има ꙗнь《какъи то Б(ог)ъ сѣдѧ в безднѣ. то єсть бѣсъ. а Б(ог)ъ єсть на н(е)б(е)си сѣдѧ на престолѣ. славим ѿ анг(е)лъ иже предстоꙗть ѥму со страхомъ не могуще на нь зрети.（中略）вама же и сде муку приꙗти ѿ мене и по с(ъ)м(ь)рти тамо.》(177.09-19)

ヤンは彼ら（＝占師）二人に「奈落に座っているのはどんな神だろうか。それは悪魔だ。神は玉座に座して天におられ、天使たちに讃め称えられておられる。その天使達は恐る恐る彼の前に立ち、彼を見ることが出来ない。（中略）　お前たち二人はこの世では私によって苦しみを受けるべきであり、また死後にはあそこで（苦しみを受けるべきなのだ）。」と言った。

この例では直接話法の発話者はヤンであり、直接話法内の無人称不定形構文の動作主体は二人の占師（テクストでは「彼ら二人」）であって両者が一致していないので「不可避性·必然性」のモダリティを持つと考えられる[32]。

30　無人称不定形構文の持つ意味として「不可避性」、「必然性」、「可能性·不可能性」以外の例を挙げているものとして *Булаховский Л.А.* Исторический комментарий к русскому литературному языку. Пятое, дополненное и переработанное издание. Киев, 1958. С. 351. がある。彼は古期ロシア語において不定形構文が直説法未来の意味の代用をすることがあると述べている。
Се яз, раб божий Панъкрат Ченей, пишю сию грамоту душевую в конце живота; а бил мя у своего села, а пойти ми с их рук, = «а пойду я (умру) от их рук»　(Духовая Панкрата Ченея, 1482 г.)
ただし Булаховский は直説法未来の意味の代用をする無人称不定形構文の例を『過ぎし年月の物語』の中からは示していない。

31　*Цейтлин и др.* (ред.) Старославянский словарь による。

32　この箇所の Лихачев 編の 1978 年版ロシア語訳（C. 191）は
Сказал им Янь: «... Вам же и здесь приять муку от меня, а по смерти — там.»
で不定形のまま訳してある。一方 Sielicki の訳（p. 139）は
Rzekł do nich Jan : "... Wy zaś przyjmiecie mękę i tu ode mnie, i po śmierci tam."
となっていて、原写本で不定形であった箇所を完了体動詞二人称複数現在形で訳している。Sielicki の訳に従えば、この不定形には「不可避性·必然性」のモダリティといったものは表われず、単に「お前たち二人はこの世では私によって苦しみを受けることになるであろう。また死後にはあそこで（苦しみを受けることになるだろう）。」といった単純未来に訳すべきである。しかし Лихачев は例文(5)では不定形を完了体動詞三人称単数現在形にしているのに対してこの箇所では動詞不定形で残している。これは例文(4)で自身の行なった訳し方と一致する。よって筆者はこの例文(6)では Лихачев の訳を支持して、この箇所の不定形には「不可避性·必然性」のモダリティがあると判断した。

(7) ѡн же рече има《лжють вамъ б(о)зи.》[ѡна же рекоста]《нама стати предъ С(вя)тославомь. А тъı не можьшь створити ничтоже.》(177.21-23)
彼(＝ヤン)は彼ら(＝占師)二人に「神々はお前たちに嘘を言っているのだ。」と言った。[これに対して彼ら二人は]「私たち二人はスヴャトスラフ[C]の前に立ちます。あなたは何も出来ません。」[と言った]。

この例文(7)では直接話法の発話者も直接話法内の無人称不定形構文の動作主体も共に占師二人である。また動詞 стати は完了体動詞である。よって例文(5)の不定形同様、ここでは「不可避性」や「必然性」の意味はなく、完了体動詞によって「予定・予告」のニュアンスが表われている[33]。

(8) рече има ꙗнь《что вамъ б(о)зи молвѧть.》 ѡнѣма же рекшема《стати намъ предъ С(вя)тославомъ.》(177.26-178.01)
ヤンは彼らに「神々はお前たちになんと言っているのか。」と言った。これに対して彼ら二人は「私たち二人はスヴャトスラフ[C]の前に立つべきです。」と言った。

例文(7)と比較した場合、同内容の構文でありながらこちらの動詞不定形に「不可避性」・「必然性」のモダリティを付与させたのは、直接話法の発話者と直接話法内の動詞不定形の動作主体が異なるためである。この例文(8)の場合、不定形を含んだ文の直前の文でヤンが二人の占師に尋ねているのは神々が彼ら二人に語った内容であることから、その後の直接話法の発話者は二人の占師になってはいるが実際には神々であると考えることができる。つまりわかりやすくこの箇所を翻訳しなおすと、“これに対して彼ら二人は「(神々は)『私たち二人はスヴャトスラフ[C]の前に立つべきです。』(と言われました)」と言った。”と考えることができる。この場合例文(4)と同様に「直接話法の発話者≠動詞不定形の動作主体」の関係が成立し、不定形 стати は「不可避性」や「必然性」のモダリティを表わすと判断した[34]。またこの文の直後にある例文(9)は直接話法の中に神の言葉を引用文として挿入する形を取

33　この箇所の Лихачев 編の 1978 年版ロシア語訳（C. 191）は
Он же сказал им: «Лгут вам боги.» Они же ответили: «Мы станем перед Святославом, а ты не можешь ничего нам сделать.»
となっており、原写本の不定形は完了体動詞現在形として訳されている。これに対して Sielicki の訳（p. 139）は
On zaś rzekł im:“Łżą wasi bogowie”. Oni zaś rzekli :“Mamy stanąć przed Światosławem, a ty nie możesz uczynić nam nic”.
となっている。ここでは助動詞 mieć によって「～することになっている」といった単純未来的な意味が現れており、上記のロシア語訳とほぼ同じと見てよい。一方で日本古代ロシア研究会訳では
彼は彼らに「神はお前たちに嘘を言っているのだ」と言った。[彼らは]「私たちはスヴャトスラフ[C]の前に立つべきであり、あなたは何も出来ません」[と言った]。
として明らかに「不可避性」や「必然性」のモダリティを訳出している。Лихачев、Sielicki と古代ロシア研究会の訳の違いが何を根拠としているのかはっきりしないが、ここでは筆者の説に近い Лихачев、Sielicki の訳を支持した。

34　Лихачев 編の 1978 年版ロシア語訳（C. 191）はこの箇所を
спросил их Янь: «Что же вам молвят боги?». Они же ответили: «Стать нам перед Святославом».

ることで、直接話法の発話者と動詞不定形の間の関係をより明確に示している。

(9) и рече има ꙗнь《что вамъ б(о)зи молвѧть.》ѡна же рѣста《сице нама б(о)зи молвѧть『не быти нам живъı ѿ тобе.』》(178.04-06)
ヤンは彼らに「神々はお前たちに何と言っているか。」と言った。彼らは「神々は私たちに『あなたが故に私たちは生きておれない』とこのように言っています。」と言った。

この例文(9)の構造を見ると直接話法文の中にもうひとつ直接話法文が埋め込まれた形になっていることがわかる。この場合、無人称不定形構文の動作主体は占師二人であり、その発話者は神々であることから「直接話法の発話者≠動詞不定形の動作主体」の関係が例文(8)より明らかになっている。もちろんこの場合も動詞不定形に「不可避性」や「必然性」のモダリティがあると判断した[35]。

(10) ѡни же поимше ѹбиша ꙗ и повѣсиша є на дубѣ【ѿмьстьє приимше ѿ б(ог)а по правдѣ.】ꙗневи же идущю домови, в другую нощь медвѣдь възлѣзъ ѹгръıзъ єю и снѣсть【и тако погъıбнуста наѹщеньємь бѣсовьскъıм инѣмъ вѣдуше а своєє пагубъı не вѣдуче. аще ли бъıста вѣдала то не бъıста пришла на мѣсто се идеже ꙗтома има бъıти. аще ли и ꙗта бъıста то почто гл(агол)аста《не ѹмрети нам》ѡному мъıслѧшю ѹбити ꙗ.】(178.15-25)
彼ら(＝ベロオゼロの人々)は二人を捕えて殺し、これを樫の木に吊るした。【(この者たちは)神から正しく報いを受けたのである。】ヤンが帰途につくと、次の夜熊がよじ登り、彼らを噛み裂いて食べてしまった。【こうして二人は他人の(破滅)は知りながら自分の破滅を知らずに、悪魔の唆しによって滅びたのである。もし二人が知っていたとしたら、捕えられることになっていたこの場所に来なかったであろう。また二人が捕えられたとしても、彼(＝ヤン)がこの二人を殺そうと思っていたのに、どうして「私たちは死ぬはずがない」と言ったであろうか。】

この例文(10)の場合、直接話法の発話者と無人称不定形構文の動作主体の関係では動詞不定形に「不可避性」・「必然性」のモダリティがあることを判断できない[36]。3-1 で述べた

と訳しており、例文(7)での自身の訳とは明らかにこの不定形の訳し方を区別している。筆者の邦訳もこの Лихачев の訳し方を判断材料の一つとした。

35 この箇所の Лихачев 編の 1978 年版ロシア語訳（C. 191）及び Sielicki のポーランド語訳（p. 139）では訳し方に違いが見られる。
и сказал их Янь: «Что же вам теперь боги молвят?». Они же сказали: «Так нам боги молвят: не быть нам живым от тебя».
i rzekł im Jan: “Co wam bogowie mówią?” Oni zaś rzekli: “To nam bogowie mówią, że nie będziemy żywi od ciebie”.
Лихачев 編の 1978 年版ロシア語訳がこの箇所を不定形構文のままにしているのに対して、Sielicki のポーランド語訳では「私たち」を主語にして、未来の意味で訳出している。

36 この箇所は今までの条件で行けば、「発話者(二人の占師)＝動作主体(二人の占師)」となって「不可避性」・「必然性」のモダリティを持たないはずである。それにもかかわらずこの動詞不定形に「不可避性」・「必然性」のモダリティがあるのではないかと判断した理由は、Лихачев 編の 1978 年版ロシア語訳（C. 191-193）がこの箇所を

ように『過ぎし年月の物語』には様々なタイプのテクストが混在した形となっている。このような場合には、「地の文」と「作者によるコメントタイプの文」とに分けて考える必要がある。そこで例文(10)の原写本と邦訳の「作者によるコメントタイプの文」をそれぞれ【　】で括ってみた。このようにしてみると無人称不定形構文を含んだ直接話法の箇所全体が「作者によるコメントタイプの文」に属していることがわかる。故に無人称不定形構文を含んだ二人の占師に関する【　】で括った構文全体が年代記作者を発話者とした文章と捉えることが出来る。すなわちここでも発話者は年代記作者、無人称不定形構文の動作主体は二人の占師となり、「直接話法の発話者≠無人称不定形構文の動作主体」の関係が成立するため、動詞不定形には「不可避性」·「必然性」ないしは「可能性」のモダリティが現れている。

この1071年のテクスト例からも「直接話法の発話者≠無人称不定形構文の動作主体」の関係が成り立つ時、動詞不定形には「不可避性」·「必然性」ないしは「可能性」のモダリティが表われており、一方「直接話法の発話者＝無人称不定形構文の動作主体」の関係が成り立つ時、動詞不定形は「不可避性」·「必然性」ないしは「可能性」のモダリティを持たず、「予定·予告」のニュアンスを表わしていることが確認された。これは986年でのテクスト分析と同じ結果である。更に無人称不定形構文が「作者によるコメントタイプの文」に含まれている場合、無人称不定形構文を含む作者によるコメントタイプの文全体発話者が年代記作者と考えることで、この仮説を適用することが可能であることも同時に提示した。

4-4. テクスト分析(1074年)

(11)《бѣси》бо рече《насѣвають черноризцем помъышленыꙗ похотѣныꙗ лукава вгажающе ѥму помъыслъı и тѣми врежаѥми бъывают имъ м(о)л(и)твъı. да приходѧщаꙗ таковꙗ мъысли възбранѧти знаменьеѥм кр(е)стнъымъ гл(агол)юще сице『Г(о)с(под)и І(и)с(у)с(е) Х(ри)с(т)е Б(ож)е нашь помилуи насъ аминь.』И к симъ воздержанью имѣти ѿ многаго брашна въ ꙗденьи бо мнозѣ и питьи безмѣрнѣ въздрастають помъысли лукавии помъыслом же въздрастъшим ствараѧѥтсѧ грѣхъ.》(183.28-184.08)

彼(＝フェオドシー)は「悪魔たちは修道僧たちに悪い考えや欲望を植えつけ、彼(＝修道僧)に悪い考えを燃え立たせます。彼らの祈りはこのことによって損なわれるのです。このような考えが浮かんできた時には『主イエス·キリストよ、私たちの神よ、私たちを憐れんで下さい。アーメン』と言って十字架のしるしによって封じなければなりません。なおその上食べ物を取り過ぎないように節制すべきです。大いに食べることや度を越して飲むことによって悪い考えが起こるからです。悪い考えが起こると罪が生じます。」と言った。

この例文(11)では「直接話法の発話者＝フェオドシー」、「無人称不定形構文の動作主体＝修道僧(たち)」となっていることから、「直接話法の発話者≠無人称不定形構文の動作主

... Если бы ведь знали, то не пришли бы на место это, где им суждено было быть схваченными; а когда были схвачены, то зачем говорили: «Не умереть нам», в то время, когда Янь уже задумал убить их?
と動詞不定形のまま訳出しているためである。

体」の関係が成立するため、動詞不定形には「不可避性」·「必然性」のモダリティが表われている[37]。

(12)《тѣмже》рече《противитесѧ бѣсовьскому дѣиству и пронъырьства ихъ. блюстисѧ ѿ лѣности и ѿ многаго сна. бодру бъıти на пѣньє ц(е)рк(о)вноє. и на преданьıа ѡ(те)чьскаıа и почитаньıа книжнаıа. паче же имѣти въ ѹстѣхъ П(са)лт(ъı)рь Д(а)в(ъı)д(о)въ подобаѥть черноризцемъ. симь бо прогонити бѣсовьскоѥ ѹнъıньє. паче же имѣти к собѣ любовь всѣмъ меншимъ и к старѣишимъ покоренье и послушанье старѣишимъ же к меншимъ любовь и наказанье и образ бъıвати собою въздержаньємъ и бдѣньємь хоженьємъ и смѣреньємъ. тако наказъıвати менша и ѹтѣшати ıа и тако проводити пость.》(184.09-21)

彼(＝フェオドシー)は「それ故に悪魔の働きかけと彼らの誘惑に立ち向かいなさい。怠惰と多すぎる眠りからも(自分の身を)守らなければなりません。教会での勤行の折にも、教父の遺訓に対しても、聖書を読む時も、心を張り詰めねばなりません。修道僧であればなおさらダヴィデの詩篇を口に出して唱えることが何にもましてふさわしいのです。これによって悪魔による悲嘆を追い払わねばならぬからです。とりわけすべての年少者に対して愛と年長者に対する服従と従順を、自分の心に持たなければなりません。年長者は年少者に対して愛と教訓を持ち、節制と終夜の祈り、立ち振る舞いと恭順さによって自ら手本を示さなければなりません。こうして年少者を教えねばなりません。そして彼らを慰めなければなりません。このように精進期を送らなければなりません。」と言った[38]。

この例文(12)では無人称不定形構文と命令形構文が混在する形となっている[39]。直接

37 この箇所の Лихачев 編の 1978 年版ロシア語訳（C. 197）は
«Бесы ведь, — говорил, — вкладывают черноризцам дурные помыслы, мысли лукавые, разжигая им желания, и тем испорчены бывают их молитвы; когда приходят такие мысли, следует отгонять их знамением крестным, говоря так: 『Господи, Иисусе Христе, Боже наш, помилуй нас, амень』. И ещё надо воздерживаться от обильной пищи, ибо от многоядения и пития безмерного возрастают помыслы лукавые, от возросших же помыслов случается грех».
となっており、どちらの不定形も「不可避性」·「必然性」のモダリティを表わす無人称動詞ないしは無人称述語を伴った形で訳出されている。1071 年の記事の中に表われた「不可避性」·「必然性」のモダリティを表わす無人称不定形構文はすべて無人称動詞·無人称述語を伴った形でなく不定形のまま訳されていたが、ここでは訳し方に変化を見せている。これが何か別の要因によるものなのか今の時点で筆者には明らかではない。しかしこの箇所での無人称不定形構文が「不可避性」·「必然性」のモダリティを表わしているということに関しては Лихачев の訳と筆者の考えは共通しており、本稿の議論上当面は問題ないものとして扱った。

38 テクストの後半部分(паче же имѣти к собѣ 以降)に関しては、例文の和訳のような解釈のほかに、всѣмъ меншимъ と старѣишимъ とを имѣти の動作主体与格として解釈することも可能である。その場合、「とりわけすべての年少者(年少修道士)たちは自分たちに対する愛ばかりではなく、年長者への服従と従順を持つべきであり、年長者は年少者に対する愛と教訓を持たねばならず、(以下省略)」と和訳することが可能である。本稿ではこのような解釈はとらず、後の бъıвати の動作主体与格として和訳を行なった。

39 この 1074 年の記事には同じ直接話法内において無人称不定形構文と命令文の混在する箇所が見られる。このような場合、両者の使い分けは何を基準としてなされているのかを検討することによって無人称不定形構文の用法の一例が明らかになると思われる。例えば *Стеценко.* Исторический

話法内の最初の述語だけが命令形(противитесѧ)であって[40]残りの九つの述語は一つが動詞不定形を伴う無人称構文(имѣти въ ѹстѣхъ подобаѥть)であとはすべて無人称不定

синтаксис русского языка. С. 17. では、「古期ロシア語において命令文の述語として動作主体の与格を伴う動詞不定形(本稿でいうところの無人称不定形構文—筆者註)を用いることが可能であった。このような使用方法は主に実務文書に広く用いられ、必然性のニュアンスを伴った命令を表わす。」と述べている。命令法について *Виноградов В.В.* Русский язык. 2-е. изд. М., 1972. С. 446. では、「命令法は話者の対談者を何らかの行為の主体になるように駆り立てる意思を表わしている。つまり命令法は感情や意思を表わすカテゴリーの一種であって、イントネーションによってその特徴を示している。」と述べている。そして *Борковский.* (ред.) Историческая грамматика русского языка. С. 67. はこの記述を古期ロシア語の命令法の特徴にも引用している。これに対して、歴史文法において無人称不定形構文によって表わされるのが与格形による動作主体の「不可避性」・「必然性」ないしは「可能性」であることは多くのものが述べているが、「話し手の意思」という特徴は無人称不定形構文に関する記述では見当たらない。よってここでは「話し手の意思」という観点から無人称不定形構文と命令文を比較していくことにする。例文(12)でフェオドシーは、最初にпротивитесѧ「立ち向かいなさい」という命令形によって修道僧たちに対する自らの強い願望を表わし、その後で修道僧として守るべき行為を無人称不定形構文の羅列によって自分の感情を排した形で表わしている。

(12-a)и бл(а)г(о)с(ло)ви Стефана и рече ѥму «чадо се предаю ти манастꙑрь. блюди(命令形二人称単数形) со ѡпасеньемь ѥго и ꙗже ѹстроихъ въ службахъ то держи(命令形二人称単数形) преданꙑа манастꙑрьскаꙗ и ѹстава не измѣнѧи(命令形二人称単数形), но твори(命令形二人称単数形) всѧ по закону и по чину манастꙑрьску.» (187.11-16)

(フェオドシーは)ステファンを祝福した。それから彼に「子よ。私は修道院をあなたに委ねます。畏れを持ってそれを守りなさい。勤行について私の定めたことを守りなさい。修道院の伝統と法規を変更しないでください。修道院の掟と秩序に従ってすべてを行ないなさい。」と言った。

この例文(12-a)では直接話法内の述語は一つが定動詞で後はすべて命令文である。ここでは命令文を用いた箇所すべてに聞き手であるステファンに対する発話者フェオドシーの意思を感じ取ることが出来る。このことは例えば同じ1074年の例文(11)などと比較してみるとよくわかる。

(11) «бѣси» бо рече «насѣвають черноризцем помꙑшленꙑꙗ похотѣнꙑꙗ лукава вгажающе ѥму помꙑслꙑ и тѣми врежаѥми бꙑвают имъ м(о)л(и)твꙑ. да приходѧщаꙗ таковꙑꙗ мꙑсли възбранѧти знаменьем кр(е)стнꙑмъ гл(агол)юще сице 『Г(о)с(под)и І(и)с(у)с(е) Х(ри)с(т)е Б(ож)е нашь помилуи насъ аминь.』 И к симъ воздержаньѥ имѣти ѿ многаго брашна въ ꙗденьи бо мнозѣ и питьи безмѣрнѣ въздрастають помꙑсли лукавии помꙑслом же въздрастъшим ствараѥтсѧ грѣхъ.» (183.28-184.08)

彼(=フェオドシー)は「悪魔たちは修道僧たちに悪い考えや欲望を植えつけ、彼(=修道僧)に悪い考えを燃え立たせます。彼らの祈りはこのことによって損なわれるのです。このような考えが浮かんできた時には『主イエス・キリストよ、私たちの神よ、私たちを憐れんで下さい。アーメン』と言って十字架のしるしによって封じなければなりません。なおその上食べ物を取り過ぎないように節制すべきです。大いに食べることや度を越して飲むことによって悪い考えが起こるからです。悪い考えが起こると罪が生じます。」と言った。

この例文(11)は同じフェオドシーの会話でありながら、(12-a)が彼の個人的な希望の告白であったのに対して、内容は説教に近いものである。よってそこにはフェオドシー自身の意思は反映されていないと考えるべきである。

40 原写本の13行目までのЛихачев編の1978年版ロシア語訳(C. 197)は以下のようになっている。

«Поэтому, — говорил он, — противьтесь(命令形二人称複数形) бесовскому действию и пронырству их, остерегайтесь(命令形二人称複数形) лености и многого сна, бодрствуйте(命令形二人称複数形) для церковного пения и для усвоения предания отеческого и чтения книжного; ...»

Лихачев は後の二つの動詞不定形も同じく命令形で訳出している。しかしこの訳し方では命令文と無人称不定形構文の間の区別がないかのような印象を与えてしまう。この箇所に関してはSielickiの訳(p. 144)が筆者の考えに近い。

Dlatego też — mówił — sprzeciwiajcie się(命令形二人称複数形) biesowskiemu działaniu i knowaniom ich, trzeba wystrzegać się lenistwa i długiego spania, być skorym do pienia cerkiewnego i uważnym w słuchaniu podań ojców i czytaniu ksiąg; ...

形構文である[41]。このテクスト内の無人称不定形構文を含む直接話法の発話者はフェオドシーであり、無人称不定形構文の動作主体は修道僧たちである。このことから「直接話法の発話者≠動詞不定形の動作主体」の関係が成り立つので、無人称不定形構文には「不可避性」·「必然性」のモダリティが付加されている。よって 986 年、1071 年に続きこの 1074 年のテクストでも「直接話法の発話者≠無人称不定形構文の動作主体」の関係が成り立つ場合、無人称不定形構文に「不可避性」·「必然性」のモダリティが表われているという仮設が証明された。また古期ロシア語において無人称不定形構文が命令文に近い働きをすることは認められているが、命令文では聞き手が何らかの行為の主体になるように駆り立てる発話者の意思を含んでいるのに対して、無人称不定形構文にはこのような発話者の意志は感じられなかった。

4-5. テクスト分析（モノマフの教訓）

「モノマフの教訓」は 4-1 で述べたように、詩篇や聖者伝の引用、息子達への詳細な教訓、そしてヴラヂミル·モノマフ[D1]の遠征と冒険を日記風に綴った部分から成るもので、『過ぎし年月の物語』にあっては他の編年体の記事とテクストのタイプが若干異なる。まず「モノマフの教訓」はほぼ全編にわたってモノマフの語りを基調とする一人称の主語によって書かれている。

(13) заѹтренюю ѿдавше Б(ого)ви хвалу и потомъ с(о)лнцю въсходѧщю и ѹзрѣвше с(о)лнце, и прославити Б(ог)а с радостью и речи[42] 《просвѣти（命令形二人称単数形）ѡчи мо[и] Х(ри)с(т)е Б(ож)е, и[же] далъ ми ѥси свѣтъ твои краснъıи.》 и єще 《Г(о)с(под)и, приложи（命令形二人称単数形）ми лѣто къ лѣту, да прокъ грѣховъ своихъ покаѧвъсѧ ѡправдивъ животъ》 тако похвалю Б(ог)а. и сѣдше думати с дружиною или люди ѡправливати или на ловъ ѣхати или поѣздити или лечи спати. (247.01-09)

---

41 原写本の 13 行目以下での構文の捉え方が筆者と Лихачев とでは異なる可能性がある。すなわち Лихачев の訳（C. 197）では

«... больше же всего подобает чернориздам иметь на устах псалмы Давидовы и ими прогонять бесовское уныние, больше иметь в себе любви ко всем меньшим и к старшим покорность и послушание, старшим же к меньшим проявлять любовь, и наставлять их, и давать собою пример воздержания, бдения и смиренного хождения; так учить меньших и утешать их и так проводить пост».

となっているが、この Лихачев の訳では подобает の支配領域が明確ではない。可能性としては最後の проводить までのすべての不定形が動詞不定形を伴う無人称構文の述語の一部ということもあり得る。本稿では подобает が「義務」·「必然性」の意味を不定形に付与して無人称構文を構成していて無人称不定形構文と近いモダリティを表わすことから両者を厳密に区別する必要はないと判断した。その上で本稿は無人称不定形構文の機能に重点を置いているので原写本 14 行目以降の動詞不定形をすべて無人称不定形構文としてカウントした。

42 原写本のこの語は pe҃ である。*Лихачев.* (ред.) Памятники литературы Древней Руси. Начало русской литературы. XI – начало XII века. С. 400. 及び *Лихачев.* (ред.) Библиотека литературы Древней Руси. Том 1. XI–XII века. С. 464. の両校正テクストではこの語を「рече」とアオリスト三人称単数の形にしてある。しかし彼のこの箇所の 1978 年版の現代語訳（C. 401）は

早朝の勤行で神の栄光を褒め称え、その後に太陽が昇れば太陽を見て、喜びに満ちて神を褒め称えなければならない。そして「神キリストよ、私の目を開いてください。あなたはあなたの美しい光を私に与えてくださいました。」と（言わなければならない）、更に「主よ、自分の残りの罪を悔い改めて、生活を正すために私に年を重ねさせてください。」と言わなければならない。このように神を褒め称え、私は従士団と相談をしたり、人を裁いたり、狩に行ったり、馬に乗ったり、眠ったりするのである。

ここでの無人称不定形構文は直接話法文内ではなく地の文に表われているように見えるが、「モノマフの教訓」はそのテクスト全体がモノマフによる「語り」の部分であると見ることも可能である。そのように考えると「例文(13)のテクスト全体の発話者＝モノマフ」、「無人称不定形構文の動作主体＝モノマフの息子達」という関係が成り立つ。この場合「直接話法の発話者≠動詞不定形の動作主体」となり、無人称不定形構文は「不可避性」·「必然性」のモダリティを表示することになる。またこの例文(13)では先の例文(12)のような無人称不定形構文と命令文の使い分けが見られる。無人称不定形構文の部分に比べて命令文の箇所には発話者であるモノマフの意思が表われているともいえる。命令文を含んだ《　》で括られた箇所[43]では命令文の直前に呼格による神への呼びかけが挿入されているが、これを発話者であるモノマフの行為主体である神への意思のあらわれと取ることも可能である。

(14) [съ]жаливъси х(ре)с(т)ыѧнъихъ д(ѹ)шь и селъ горѧщихъ и манастъырь. и рѣхъ《не хвалитисѧ поганъымъ.》(249.17-19)

私はキリスト教徒の魂と、燃え上がる村々や修道院を惜しんで、「異教徒たちが勝ち誇るべきではないのだ。」と言った。

この例文(14)でも「直接話法の発話者(私＝モノマフ)≠動詞不定形の動作主体(異教徒たち)」となって無人称不定形構文は「不可避性」·「必然性」のモダリティを表示する[44]。

На заутрене воздавши богу хвалу, потом на восходе солнца и увидев солнце, надо с радостью прославить бога и сказать : «Просвети очи мои, ...»
となっている。この訳では сказать は прославить と同格で надо と結び付いている。だとすると原写本の прославити と同じく不定形の「речи」と取るべきではないかと筆者は判断した。また Sielicki の訳（p. 186）も同様で
O jutrzni oddawszy Bogu chwałę, potem trzeba też o wschodzie słońca, ujrzawszy słońce, pochwalić Boga z radością i rzec: «Oświeć oczy moje, ...»
となっており、動詞不定形 rzec は同じく動詞不定形 pochwalić と共に trzeba と結びついている。更に古代ロシア研究会の訳も例文(13)の筆者の邦訳と同じ訳をしていることもその根拠となっている。

43　本稿では原写本において直接話法の部分を《　》で括って表示し、また直接話法内の引用文は『　』で表わすことにしている。しかし、この「モノマフの教訓」は筆者の考えではテクスト全体が“モノマフの語り”であるので、それに従えばテクスト全体を《　》で括り、テクスト内での直接話法を『　』で括るべきである。しかしここでは便宜上他のテクストと同様に直接話法を《　》で括ることにした。

44　Лихачев 編の 1978 年版ロシア語訳（C. 405）は以下のようになっている。
пожалел я христианских душ, и сел горящих, и монастырей и сказал: «Пусть не похваляются язычники».

4-6. テクスト分析(「地の文」に現れる無人称不定形構文)

本章で取り上げた4つのテクストでは、「地の文」に現れる無人称不定形構文の例が一つも現れなかった。そこで本項ではこの例をそれ以外の記事からいくつか取り上げ、本章で行なった4つのテクストと同様の考察を行なう。

(15) Полѧномъ же живщимъ ѡсобѣ по горамъ симъ, бѣ путь изъ Варѧгъ въ Греки. и изъ Грекъ по Днѣпру. и верхъ Днѣпра волокъ до Ловоти. [и] по Ловоти внити в ЬІлмерь ѡзеро великоє. из негоже ѡзера потечеть Волховъ и вътечеть в ѡзеро великоє Ново. [и] того ѡзера внидеть устьє в море Варѧжьскоє и по тому морю ити до Рима, а ѿ Рима прити по томуже морю ко Ц(а)рюгороду, а ѿ Ц(а)рѧгорода прити в Понотъ морѧ в неже втечеть Днѣпръ рѣка. (007.01-11)

これらの山々に別々にポリャネが住んでいた頃、ヴァリャギからグレキへの道があった。そしてそれはグレキからドネプルを通る。ドネプルの上流にはロヴォチまでの連絡水路がある。またロヴォチを通って大きな湖イルメリに入ることができる。その湖からはヴォルホフが流れ出し、大きな湖ネヴォへと流れ込んでいる。その湖の出口がヴァリャギ海に入る。そして(その道は)海を通ってローマまで行くことができる。またローマからその同じ海を通ってツァリグラドへ至ることができる。またツァリグラドからポントス海に至ることができるが、その海へはドネプルが流れ込んでいる。

ここでの無人称不定形構文が表わしているのは「可能性」であって「不可避性」・「必然性」ではない[45]。Борковский は無人称不定形構文の動詞不定形が運動動詞の場合、「可能性」のモダリティを不定形が持つとしてこの例文(15)の例を挙げている[46]。しかし次の例では無人称不定形構文の不定形は運動動詞にもかかわらず、「不可避性」・「必然性」を表わしている。

(16)【х(рест)ьѩномъ бо многъими скорбьмї и напастьми внити в ц(а)рство н(е)б(е)сноє, а симъ поганъім и ругателем на снмь свѣтѣ приимшимъ весельє и просторонство, а на ѡномь свѣтѣ приимуть м(у)ку с дьѩволомъ ѹготовании ѡгню вѣчному.】(233.11-15)

【何故ならキリスト教徒らは多くの悲しみと禍によって天国に入るべきであるが、この異教徒たちや罵る者どもはこの世では楽しみと自由を受けても、いずれは永遠の火に焼かれて悪魔と共に苦しみを受けるのである。】

---

45 Лихачев 編の1978年版ロシア語訳(C. 27)は以下のようになっている。
Когда же поляне жили отдельно по горам этим, тут был путь из Варяг в Греки и из Греков по Днепру, а в верховьях Днепра — волок до Ловоти, а по Ловоти можно войти в Ильмень, озеро великое; из этого же озера вытекает Волхов и впадает в озеро великое Нево, и устье того озера впадает в море Варяжское. И по тому морю можно плыть до Рима, а от Рима можно приплыть по тому же морю к Царьграду, а от Царьграда можно приплыть в Понт море, в которое впадает Днепр река.

46 *Борковский.* Сравнительно-исторический синтаксис. С. 167.

この例文(16)は年代記作者のコメントを述べた文である。よって「発話者＝年代記作者」、「無人称不定形構文の動作主体＝キリスト教徒」となって「直接話法の発話者≠動詞不定形の動作主体」の関係から「不可避性」·「必然性」のモダリティが表われている[47]。このことから必ずしもБорковскийの言うように無人称不定形構文の不定形が運動動詞であるから「可能性」のモダリティを持つとはいえない。むしろ「直接話法文·作者によるコメントタイプの文」と「地の文」という関係で無人称不定形構文のモダリティを捉えたほうが、その対比関係はよりはっきりと現れるようである。更にこれらの例を含めて『過ぎし年月の物語』で見つかった「地の文」に現れる無人称不定形構文すべてが「可能性」のモダリティを表わしていた。もし「地の文」で「不可避性」·「必然性」のモダリティが表われないのだとすれば、無人称不定形構文の「地の文」と「直接話法文·作者によるコメントタイプの文」での働きの違いを考える必要がある。その際、両者の大きな違いは発話者存在の有無であると思われる。

4-7. テクスト分析：まとめ

本章では前章での結果として明らかとなった無人称不定形構文が多く現れる3年分の記事と一人称の文体が特徴的な「モノマフの教訓」の4つのテクストを取り上げ、発話者と与格によって表わされる動作主体との関係が無人称不定形構文の表わすモダリティに及ぼす関係ついて考察した。ここでは本章のテクスト分析からわかった結果を簡単にまとめておきたい。

まず『過ぎし年月の物語』において無人称不定形構文は圧倒的に直接話法文内、もしくは作者によるコメントタイプのテクスト内で見られた。そしてこれらの無人称不定形構文の場合、発話者と与格によって表わされる動作主体との関係が無人称不定形構文の持つモダリティの種類を決定しているとの仮説が成り立った。すなわち直接話法の場合、直接話法の発話者と直接話法内の無人称不定形構文の動作主体が異なる時、無人称不定形構文は「不可避性」·「必然性」や「可能性」のモダリティを表わした。また作者によるコメントタイプの文や一人称文の場合、テクストの語り手と無人称不定形構文の動作主体の間に「テクストの語り手≠動詞不定形の動作主体」の関係が成り立つ時、無人称不定形構文は「不可避性」·「必然性」や「可能性」のモダリティを表わした。その一方、直接話法の際に「直接話法の発話者＝動詞不定形の動作主体」の関係が成り立つ時、動詞不定形は「不可避性」·「必然性」や「可能性」のモダリティを表わさず、そこには「予定・予告」のニュアンスが表われていた。更にこの「直接話法の発話者＝動詞不定形の動作主体」の関係が成り立つ際の動詞不定形には完了体動詞が用いられているケースが圧倒的であった。また地の文では発話者と動作主体との関係によらず、常に「可能性」のモダリティのみを表示していた。

47　Лихачев編の1978年版ロシア語訳（C. 243）は以下のようになっている。
христианам ведь через множество скорбей и напастей предстоит войти в царство небесное, а эти поганые и оскорбители на этом свете имеют веселье и довольство, а на том свете примут муку, с дьяволом обречены они на огонь вечный.

5. 『過ぎし年月の物語』内で「予定・予告」のニュアンスが表われるその他の無人称不定形構文に関して

次に見るのは『過ぎし年月の物語』に見られる「予定・予告」のニュアンスを持つと見られる無人称不定形構文の例である。

(17) дѣлаѥму же ковчегу за сто лѣт. и повѣдаше Нои. ꙗко быти потопу. и посмѣхахусѧ ѥму.(090.21-23)
ノアは100年かかって箱舟を作っているあいだ中、洪水が来るだろうと言っていましたが、(人々は)彼を嘲っていました。

(18) в си [же] времена приде волхвъ прелщенъ бѣсомъ пришедъ бо Кыѥву гл(агола)ше сице. повѣдаꙗ людемъ ꙗко на пѧтоѥ лѣто днѣпру потецѣи вспѧть и землѧмъ преступати на ина мѣста. ꙗко стати Гречьскы земли [на Рꙋскои], а Русьскѣи на Гречьскы и прочимъ землѧмъ измѣнитисѧ. (174.22-28)
この頃、悪魔に誘惑された占師が来た。彼はキエフに来て次のように、すなわち五年目にドニエプルが逆流し、大地が別の場所に動き始めるだろう、グレキの国が[ルシの国に]位置し、ルシの国がグレキの国に(位置するだろう)、また他の国々も変わるであろうと人々に物語った。

これらは第4章のテクスト分析を当てはめた場合、「発話者≠無人称不定形構文の動作主体」の関係が成り立つはずであるが、実際には無人称不定形構文は「不可避性」・「必然性」や「可能性」のモダリティではなく、「予告・予定」のニュアンスを伴って訳すべきであると考えられる。実際にЛихачев編の1978年版ロシア語訳、Sielickiによるポーランド語訳、古代ロシア研究会による邦訳すべてがここをそのように訳出している[48]。ここで注目したいのは動作主体を示す与格形名詞に共通する特徴である。これらの2例は間接話法文ということで、いままで扱ってきたものとは異なるが、その問題は別にしても、ここでは与格による動作主体がそれぞれ「洪水」、「ドニエプル(河)」、「大地」、「グレキの国」、「他の

48 以下にЛихачевの訳を示す。
(17) 100 лет делал Ной свой ковчег, и когда поведал Ной людям, что будет потоп, посмеялись над ним.(C. 105)
(18) В те же времена пришел волхв, обольщенный бесом; придя в Киев, он рассказывал людям, что на пятый год Днепр потечет вспять и что земли начнут перемещаться, что Греческая земля станет на место Русской, а Русская на место Греческой, и прочие земли переместятся.(C. 189)
次にSielickiの訳を示す。
(17) Budując zaś arkę przez sto lat, opowiadał Noe, że będzie potop, i śmiano się z niego.(p. 73)
(18) W tychże czasach przyszedł czarodziej, opętany przez biesa; przyszedłszy bowiem do Kijowa mówił ludziom, że na piąte lato Dniepr popłynie wstecz i ziemie przesuną się na inne miejsca, że ziemia grecka stanie na ruskiej, a ruska na greckiej, i inne ziemie przemienią się.(p. 137)

国々」とすべて無生物名詞となっている[49]。

6. 結論：無人称不定形構文における動作主体とモダリティの関係

本稿のテクスト分析の結果明らかになった無人称不定形構文内の動作主体とモダリティの関係をまとめると次のようになった。

a) 直接話法の場合、「直接話法の発話者≠直接話法内の無人称不定形構文の動作主体」の関係が成り立つ時、無人称不定形構文は「不可避性」·「必然性」や「可能性」のモダリティを表わす。

b) 直接話法の際に「直接話法の発話者＝直接話法内の無人称不定形構文の動作主体」の関係が成り立つ時、動詞不定形は「不可避性」·「必然性」や「可能性」のモダリティというより「予定・予告」のニュアンスを表わす。

c) 作者によるコメントタイプの文や一人称文の場合、「テクストの語り手≠無人称不定形構文の動作主体」の関係が成り立つ時、無人称不定形構文は「不可避性」·「必然性」や「可能性」のモダリティを表わす。

d) 地の文では発話者(書き手)と動作主体との関係に関わらず「可能性」のモダリティのみを表わす。

e) ただし、a)及びc)の場合でも、動作主体にたつ名詞が無生物名詞の場合はその限りではなく、無人称不定形構文は「予定・予告」のニュアンスを持つと考えられる。

本稿はロシア語歴史文法の分野で古期ロシア語に特徴的な構文である無人称不定形構文が複数のモダリティを表示することを認めながらも、それらの複数あるモダリティの中からどのような条件で任意のモダリティが選択されうるのかという未解決の問題を読み解く試みを持つものである。上記の本稿で提案した無人称不定形構文内の動作主体とモダリティの関係についての仮説は、現時点において『過ぎし年月の物語』の中で確認されたに

49　脚注の30で示したように、*Булаховский.* Исторический комментарий. С. 351. は古期ロシア語において無人称不定形構文の不定形が直説法未来の代用として用いられることがあると述べている。しかし不定形は時制とは別のカテゴリーに属するものである。また *Стеценко.* Исторический синтаксис русского языка. С. 89. では無人称不定形構文の動作主体に立つ与格が無生物主語の場合についての記述がある。Стеценко によると、この場合本来の動作主体は明示されておらず、このような無人称不定形構文は「不可避性」(неизбежность)を表わすとしている。しかし本稿で取り上げたような「テクストの語り手と不定形の動作主体が一致する場合」や「不定形の動作主体が無生物主語の場合」には「不可避性」や「可能性」のモダリティを表わさないという仮定が成り立った。よって本稿ではこの両者の折衷案として無人称不定形が「テクストの語り手と不定形の動作主体が一致する場合」や「不定形の動作主体が無生物主語の場合」には直説法未来の意味に近い「予定・予告」のニュアンスを持つ、と仮定するにいたった。この件に関しては今後も研究を進めていく必要がある。

過ぎない。特に『過ぎし年月の物語』の中では見つけることのできなかった、“一人称文の中で「テクストの語り手＝動詞不定形の動作主体」の関係にあたる場合”について、今回の仮定 b) と同様に、動詞不定形が「不可避性」・「必然性」や「可能性」のモダリティではなく「予定・予告」のニュアンスを表わすという結果を得ることができるのか、この他の古期ロシア語文献から研究を進めていく必要がある[50]。更に今後はこの本稿の仮説がこれら以外の古期ロシア文学作品にも適用できるのか更に研究を進めていく必要がある。

50　なお『過ぎし年月の物語』の調査では作者によるコメントタイプの文や一人称文の中で「テクストの語り手＝動詞不定形の動作主体」の関係にある例は見つからなかったが、それに当てはまる 1 例を古期ロシア語文献を代表する散文作品である『イーゴリ軍記』の中から示すことにする。

Пѣвше пѣснь старымъ княземъ, а потомъ молодымъ пѣти:

いにしえの公たちに賛歌をささげたのちには、若き公たちにも（賛歌を）ささげよう。

これは『過ぎし年月の物語』の中では見つけることの出来なかった、一人称文の中で「テクストの語り手＝動詞不定形の動作主体」の関係にあたる例である。すなわち「テクスト全体の発話者＝作者」「動作主体＝（作者を含めた）我々」となり「テクストの発話者＝動作主体」の関係が成立する。よって無人称不定形構文は「不可避性」・「必然性」や「可能性」のモダリティというより「予定・予告」のニュアンスを持つはずである。ただ、『イーゴリ軍記』もまたその成立過程やテクストの構造に大きな問題を孕んでいるため、ここでは他の古期ロシア文学作品内にも本稿の仮定を裏付ける可能性があることを提示するに留めることにする。『イーゴリ軍記』内の無人称不定形構文に関してはまた稿を改めて論ずることにしたい。

Об употреблении безличных инфинитивных предложений в «Повести временных лет»

Ватанабэ Кику

«Повесть временных лет» является одним из самых ранних памятников древнерусского языка, дошедших до нас. В ней содержится изложение древнейшей истории славян, истории Руси вплоть до 1110 г., а также несколько агиографических памятников и «Поучение» Владимира Мономаха. В «Повести временных лет» часто встречаются безличные инфинитивные предложения, где главный член выражен инфинитивом, не зависящим ни от какого другого слова в предложении. «Обычно при независимом предикативном инфинитиве стоит дательный падеж лица (субъект), которому следует совершить действие, названное инфинитивом» (А.Н. Стеценко). Инфинитив в них функционирует в качестве предиката и выражает различную модальность. До настоящего времени было принято мнение, что безличные инфинитивные предложения имеют следующие основные модальные значения: долженствование, необходимость, возможность и невозможность, неизбежность действия. Однако, кроме указанных модальностей, в «Повести временных лет» встречаются примеры, когда безличные инфинитивные предложения имеют оттенок предупреждения.

Таким образом, в результате анализа памятника были выявлены следующие типы отношений между субъектом безличных инфинитивных предложений и модальностью.

а) В прямой речи текста, если говорящий в прямой речи не равняется субъекту в безличном инфинитивном предложении, то безличное инфинитивное предложение имеет значения долженствования, необходимости, неизбежности, возможности или невозможности действия.

б) В прямой речи текста, если говорящий в прямой речи равняется субъекту в безличном инфинитивном предложении, то безличное инфинитивное предложение может иметь оттенок предупреждения и не имеет значения долженствования, необходимости, неизбежности, возможности или невозможности действия.

в) В текстах повествовательного типа (например, в «Поучении Мономаха»), если повествователь в тексте не равняется субъекту в безличном инфинитивном предложении, то безличное инфинитивное предложение имеет значения долженствования, необходимости, неизбежности, возможности или невозможности действия.

г) В текстах описательного или объяснительного типа, независимо от отношений между говорящим (или повествователем) и субъектом в безличном инфинитивном предложении, безличное инфинитивное предложение имеет только значение возможности или невозможности действия и не имеет значения долженствования, необходимости, неизбежности.

д) Если субъектом является неодушевленное существительное, то независимо от отношений между говорящим (или повествователем) и субъектом безличное инфинитивное предложение может иметь оттенок предупреждения.

Рассмотренные в статье типы безличных инфинитивных предложений позволяют сделать вывод о том, что выбор модальности в тексте зависит не только от контекста, но также и от отношений между говорящим и субъектом безличных инфинитивных предложений. В настоящей статье проанализированы безличные инфинитивные предложения в «Повести временных лет», однако это исследование необходимо продолжить на материале других памятников древнерусского языка.